

しつけ研究の課題を再検討する

—しつけ研究の成果はしつけ手に届いているのか—

増 田 翼

(2016年3月1日受理)

はじめに

しつけに関して研究するということは〈実践の学〉に相当するということをまずは念頭に置かなければならない。……もちろん、〈実践の学〉だからといって即効薬のようなはたらしを求めるわけではないが、本稿で辿った研究の多くを見ても分かる通り、一つひとつの成果が、実際のしつけ場面に対峙する保護者たちの複雑に絡み合った不安や葛藤の軽減に貢献できるかといえは難しいのが現状である。だからこそ今後は、それぞれの立場からのしつけ研究の成果を集約し、それらを結びつけて新たな知見と意味を創出する姿勢が必要なのではないだろうか。それはまた、しつけ場面の混沌状況を適切に照らし出してくれるような、理論と実践の橋渡しを考える必要がある、ということでもある¹⁾。

筆者(増田)はかつて、「しつけ研究の系譜と課題」と題した論稿のなかで、しつけについて各学問領域がどのような研究の系譜を辿ってきたのかを描くと同時に、上述のようなしつけ研究全般に見られる課題を提起した。執筆当時は、これ以上の考察にまで踏み込む準備がなかったこともありここで論述を終えていたが、この機会に、今一度この点について再考を試みたいと思う。それというのも、この2、3年の間、様々な子育て家庭と出会い、しつけに関する相談を受けるなかで、筆者自身が「理論と実践の橋渡し」に苦慮していることに気づかされたからである。特に、相談されるたびに、最終的には「そんなに悩まないで、肩の力を抜いて」と同じセリフを口にしてしまっ

ていることに、自分としては納得していない。おそらく、相談した方にとってもこのセリフからは励まし以外の大きな意味を感じることはできないだろう。親御さん方は、もう少し違う〈答え〉を求めているはずなのだが、こちらとしては、抱えている悩みをはっきりと解消できるような研究成果がすぐには思い当たらないことが多いのである。どちらかというと、親御さん方の日々の経験を、彼女ら/彼らが見て感じているそのままのかたちでもって適切に表現できる言葉を、一緒になって探している、ということが多いかもしれない。

ところで、しつけについては、誰しものが子ども期に何らかの経験をしている。それがゆえに、私たちは〈日常感覚としてのしつけ〉というものを知ってしまっている。あるいは、自分のなかにつくり上げてしまっている。ところが、そうした個人的な〈しつけ理解〉をこえて、しつけに関する実践知を体系的に集約し研究成果へと結びつけようとする、この〈日常感覚としてのしつけ〉とは異なる何かとして提示されてしまうことが往々にしてあるようなのだ。換言すれば、個人的な〈しつけ理解〉と、研究者による〈しつけ理論〉との間に大きな断絶が存在する場合がある、ということである。これだけ膨大なしつけ研究の成果が存在しているにもかかわらず、それらが適切に還元されないままに、多くのしつけ手たちは暗中模索の日々を繰り返しているのである。

こうした実態を再認識させてくれたのは、発達心理学および幼児教育学が専門で、1980年から日本研究を行っているスーザン・D・ハロウェイ(Susan D. Holloway)の以下の記述である。

他の国も同様であるが、日本でも、親には、自分たちが適切なことを行っているのかどうかを判断するための、信頼できる道しるべがほとんどない。彼女たちの対応は、少なくとも短期的に見ると、有効なものであったのかどうかかわからないことが多いのである。いずれにしても、あるひとつの養育行動がうまくいくかどうかは、その問題にかかわる個々人の性格ばかりでなく、家族の成員相互の関係の歴史や、その状況の特性による。状況がこのように複雑で曖昧なものなので、自分が適切な対応法を見いだすことができるという、ある種の自信をもつことが親たちには非常に重要である²⁾。

ここに書かれている「信頼できる道しるべがほとんどない」とは、具体的にはどういった状況なのであろうか。また、「ある種の自信をもつこと」が重要とあるが、なぜ、数多のしつけ研究成果が活かされないままに、自信をもつかどうか鍵になってしまっているのだろうか。

本稿では、以上のような問題意識を背景に、①しつけ手を取り巻く環境——本稿では特に育児言説に焦点を当てる——とはいかなるものなのか、②しつけ研究の成果はなぜ活かされていないのか、という2点について見ていきたい。こうした考察を通して、これまでのしつけ研究の〈枠組み〉やしつけ研究者自身の〈姿勢〉を根底から問い直してみたい。

I. しつけ手はどういった育児言説に取り巻かれているのか

2013年に発表された石川真由美（1959-）の論文「育児書・育児雑誌におけるしつけに関する考え方の分析 —「叱る」「ほめる」に着目して—」³⁾によると、育児の「不安を軽減するため」に活用されるべき育児書、育児雑誌に書かれた「しつけに関する育児情報」は、実際には「多様であり、一部には偏った内容」も見受けられるという。さらに「それらの多くは、大人側の方法論に終始し」てしまいがちなのだという。石川は、親たち

が「どの情報を選択し、どう理解し受け止めるかの難しさ」に言及しながらも、『叱らない子育て』『ほめて育てる』などをキーワードとしたメディアの偏った『…あるべき』『…がよい』等の情報の氾濫があり、子どもとの関わり方や子育てへの自信のなさに影響を与えているのではないだろうか」と推察している。たしかに石川のいうように、こうしたメディアの多様な記述が、しつけ手の不安や自信のなさに影響を与えているという点はあるかもしれない。

ただしここには、育児書、育児雑誌の編集者側からの視点もつけ加える必要があるだろう。それというのも、しつけに悩む多くのしつけ手たちを読者とする以上、編集者としては、極力、分かりやすい文体で、なおかつしつけの効果が現れやすい内容の記述を心がけるはずだからである。それはつまり、〈褒める〉〈叱る〉といった二項対立的な明快さが求められたり、具体的で有効的な「しつけの方法論」で誌面を飾る傾向を強めたりすることを意味する。これらをまとめるとすれば、以下のように説明できよう。メディアの拡大と発展によってしつけ手たちの不安が助長される一方で、そうした不安を解消するために読まれる育児書の記述は明快さと有効性が満たされるように生産され、さらにそうした明快さと有効性に満たされた記事内容が、実際の複雑なしつけ場面を必ずしも解決に導かない場合、それによってしつけ手たちのさらなる不安が助長されていく。こういったスパイラル状況がしつけ手を取り巻いているといえるのである⁴⁾。

ところで、育児書、育児雑誌の記事内容という観点でいえば、たとえば、高橋均（1973-）と天童睦子（1957-）による論稿「資源としての育児雑誌」に次のような考察がある。

70年代の記事では、専門家によるアカデミックな記述がなされる傾向があった。その知識生産のエージェントは、育児の専門家や大学教員、研究所職員などが中心であり、啓蒙的性格が強い記述となっていた。総じて、70年代のしつけに関する記事では、社会全体の秩序維持の文脈のなかで「しつけ」がとらえら

れ、「しつけはこうあるべき」とする規範が明示的な内容となって提示されている。

80年代に入ると、記事には専門的用語がほとんど登場せず、研究者や専門家は問題解決においては補助的な役割をはたすようになってくる。……また、読者の体験談の投稿や身近なしつけの事例が増加し、読者参加型の傾向が強まっている。

90年代の「しつけ」記事では、母親自身の日常的会話に近い記述によって記事が構成されている。90年代の記事では、多様な場面での「しつけ」方が提示されているものの、母親じしんによるさまざまな意見や対処法が豊富に例示されることによって、「それぞれいろいろなやり方があっていい」との印象を読者に与えている。「しつけ」をめぐる必ずしも一元的な規範が提示されず、多様性を強調した誌面づくりがなされている⁵⁾。

簡潔ながら、こうした年代の変遷を見るだけでも、しつけ手を取り巻いている育児言説が時代性に大きく左右されやすいものであると理解できよう。すなわち、生活の隅々にまで規範が張り巡らされ模範的な人生が問われた時代から、お互いの違いを認めそれぞれの価値観を尊重し自分らしさの伸展を最大限サポートしていく「多様性」の時代へと移り変わることで、しつけに対する人々の捉え方も変化した——「こうあるべき」から「それぞれいろいろなやり方があっていい」——ということなのであろう。

けれども、そうした時代の変遷は、しつけ手にとっては生きづらさにつながっているように思われる。上にもあるように、社会全体の価値観の多様化は、しつけの多様性の容認に直結する。裏を返せば、しつけの何を重んじ何をなすべきかは、しつけ手自身が決めるしかないということなのである。冒頭で触れたハロウェイは、「自分が適切な対応法を見いだすことができるという、ある種の自信をもつことが親たちには非常に重要」だと述べていたが、この記述は、日本人の母親へのイ

ンタビュー調査を重ねたハロウェイだからこそ、誰もしつけの決め手を持ち合わせず自信こそが最大の原動力である、という状況を察した結果なのであろう。彼女は、続けて次のようにもいっている。

自信に欠ける母親は、役立つ親であるために必要な技能をもっていたとしても、自信のなさからそうしたスキルを実際に活用することができなくなっている。子育てに自信がないために、行動を起こすべき機会を逃してしまったり、ひとつのやり方から別のやり方へ行ったり来たりを繰り返している⁶⁾。

このように、「ひとつのやり方から別のやり方へ行ったり来たりを繰り返している」ようなしつけ手は、できることならば確実なしつけ方法の獲得を望むことだろう。しかし、現状の育児言説は、以下に見るように混沌とした様相を呈しており、さらなる混乱を招いている可能性は否めないのである。

1. 〈褒めれば良い〉のか 〈叱れば良い〉のか

〈褒める〉か〈叱る〉かの論議はかねてから存在するが⁷⁾、たとえば最近でも、2013年には経済学博士、太田肇（1954-）の『子どもが伸びるほめる子育て—データと実例が教えるツボ』⁸⁾が「ちくま新書」から、一方で2015年末には心理学博士、榎本博明（1955-）の『ほめると子どもはダメになる』⁹⁾が「新潮新書」から上梓されている。この2冊はタイトルからも分かる通り、まったく正反対の主張が書かれた子育て論だが、当然、どちらも根拠データにもとづき論を展開しており論旨は明快である。しかし、もし仮にこの2冊を同時に読んだしつけ手がいるとすれば、「じゃあ、どっちなの?」と困惑してしまうことは想像に難くない。

当然、落ち着いて考えれば分かる通り、結局は、〈褒める〉も〈叱る〉もどちらも必要であるし、その場の状況や、子どもとの相性などによっても使い分ける必要は出てくるだろう。上の2冊のように、研究という観点で調査すれば、こちら

が良いという〈答え〉に辿りつくことはあるかもしれない。しかし、それはあくまで研究者の視野の問題であり、決して読者であるしつけ手の問題ではない。実際のしつけ手にとっては、ケースバイケースなのである。

ところで、社会統制理論によれば、褒める（称賛）も叱る（懲罰）もどちらも事後的に行う社会統制の一手法であって、社会統制という目的のために行使されるという点では変わりがない¹⁰⁾。本来、状況によって称賛もあれば叱責もあるというだけの話のはずだが、これほどまでに〈褒める〉か〈叱る〉かという二項対立的な把握に過敏にならざるを得ないのだとしたら、何がその要因なのであろうか。たとえば、前稿「なぜ『しつけ』に悩まされるのか」¹¹⁾でも少し触れたように、しつけに関わる人数の減少とそれに伴う親子関係の濃密化の影響で、一方では、子どもの成長のために大半の責任を負っている（と感じている）しつけ手自身が失敗を恐れて理想的なしつけ方法を追い求めているという実態、他方では、子どもとの関係がいがみ合うものであったら生活がそもそも成立しないという状況から、〈可能ならば褒めるに越したことはない〉〈叱るとしても少ない労力で最大の効果が出るようにしたい〉といった思考パターンの普及が、それらの要因として挙げられるのかもしれない。

2. 〈親の価値観を押しつけてはいけない〉のか

2007年創刊以来、現在も発刊を続けている育児雑誌『AERA with Baby』の創刊号には、「親も子どももいっしょに幸せになれる本当の『しつけ』」という特集が組まれていた。そのなかの記事に、次のような記述が見受けられる。

「しつける」という言葉には、子どもが間違った行いをした時に親がしっかりと教え諭す、といったイメージが付きまといまふ。そのため、しつけを「親の価値観の押しつけ」ととらえて嫌う人もいることでしよう。

しかし、「しつけ」と「親の価値観の押しつけ」

とは「違うものだ¹²⁾」、とこの記事では力説されている。またさらにページを進めていくと、「子どもに親の好みを押しつける」のは「よくある『しつけ』のカン違い¹³⁾」だと書かれていたり、「親は自分が求めているものが社会的ルールなのか、自分の好みなのかを常に問いかける必要がある¹⁴⁾」と述べられていたりする。期せずして、あるしつけ手がこの記事だけを読んだとすれば、親の価値観や好みを子どもに伝えるのは極力避けた方がよいようだ、と理解する可能性は十分にある。

それでは、まったく別の育児雑誌ではどうだろうか。たとえば、主婦の友社から出版されている育児雑誌『Baby-mo』を開いてみよう。偶然目にとまった掲載記事「子どもを伸ばすvs.ダメにするしつけ」には、「ものごとの善悪は身近な大人の価値観が基準になります」という小見出しにしたがって、次のように書かれている。

ママが笑顔でうなずけばさわるし、こわい顔をすれば手を引っ込めます。身近な大人の価値観を善悪の判断基準にしていけるのです¹⁵⁾。

まったく違う時期に出版された、まったく別の育児雑誌を並べるのも良くないかもしれないが、ここでの考察には大きな影響はないだろう。むしろ、このような矛盾する育児言説が無数に氾濫しているのが子育て環境なのである。上の二つの雑誌記事は、それぞれ別々の保育者養成校教員が記事制作に携わっているが、もちろん記事全体とその文脈を考慮すれば、親子間のやりとりの大切さを説くという趣旨に違いがないことは理解できる。しかし、往々にして考えられるのは、しつけ手が雑誌記事の一部分にのみ注目し、それをしつけ方法の拠り所としてしまう、という事態である。

そもそも、〈親の価値観を押しつけてはいけない〉といった記述が書かれるのは、大人の身勝手による〈しつけという名の虐待〉なども懸念される日本社会全体のバランスを考慮してのことなのかもしれない。しかし、だからといって、「しつけ行為」が「文化伝達」を担っている以上¹⁶⁾、大人の側の価値観から解放された〈真っ白な〉しつけ行為などあり得ないし、自分の好みを無視して

子どもと接することなど、普通の人間ならば不可能である、ということを忘れてはならないだろう。

いずれにせよ、自分は適切な行為をしているのか、と考えざるを得ない現代のしつけ手たちにとっては、こうした育児言説の混沌状況は好ましいものとはいえない。それでは、従来のしつけ研究はこうしたしつけ手たちの状況に対して、なぜ貢献できていないのであろうか。はたまた、しつけ研究の成果はなぜ活かされていないのであろうか。

Ⅱ. しつけ研究の成果はなぜ活かされていないのか

1. 研究という営みの特徴と限界

そもそも、研究を担う研究者というのは、学会や研究会といった研究者集団への所属を前提として活動を行っている。もちろん研究者集団との交流が必須の条件ではないものの、少なくとも自らの専門領域を踏まえたうえで研究が実施されていることに異論はないだろう。そしてまた、こうした研究者集団が必然的に抱える政治性が一定の権力を生み、暗黙裡に問いの立て方や研究方法を方向づけたり限界づけてしまうことも、今や周知のこととして理解されている¹⁷⁾。

研究成果が認められるためにも、属する研究者集団の流儀に従うことは、研究者としては当然の振る舞いであるが、それはつまり、無数にあるであろう研究方法のなかから一つの方法を選択し、その方法によって研究対象に向き合うということを意味する。当然、そこから明らかにされるのは、その研究者集団の研究方法から導き出される結果であって、仮にまったく別の研究者集団の研究方法によって同じ研究対象に向き合ったとしても、そこから導き出されるものは別種のものになってしまうことだろう¹⁸⁾。別の角度からいえば、「いかなる方法的対処にもそれぞれまったく特有の可能性と限界があり、したがって「一つの方法からはある特定のことしか期待できないし、また逆に、その方法はそれ以外の何の役にも立たない¹⁹⁾」のである。

こうした事態はもちろん、しつけ研究にも当てはまる。しつけを研究しようとする各学問領域の流儀それ自体が、特有の研究結果を明らかにする

とともに、明らかににはできない限界性をも伴っているのである。それはつまり、場合によっては、個人的なしつけ理解＝〈日常感覚としてのしつけ〉とはまったく異なるようなかたち——たとえば、一部の条件に当てはまるようなときのみ相応しいような結果——として成果が導き出される可能性がある、ということを意味する。研究をする、ということは、元来、このような限界を常に伴っている行為なのである。

2. しつけを研究しようとする

実証的方法が選ばれやすい傾向について

従来のしつけ研究の方法論的傾向を見れば、経験科学的方法、とりわけ実証的方法による研究が大半を占めていることが分かる。また実証的方法というからには、考察の過程において統計学的処理が用いられることも多く、これらは全体のなかでの割合であったり、ある因子間の相関関係などを根拠としながら結論を導き出していく。たとえば、しつけ手の日常の経験をアンケートなどによって部分的に取り出し、その収集データを分類・解析し提示することで、しつけの実態を示していく、というのが一般的であろう。もう少し具体的にいうと、どのようなしつけを行うと子どもにはいかなる影響（人格形成、社会適応など）があるのか、あるしつけ場面ではどのようなしつけ方法（方略）が好まれるのか、社会階層によってしつけはどのように異なるのか、といったことである。これらは心理学もしくは社会学を地盤とする研究者たちの方法である²⁰⁾。いずれにせよ、これらの研究が目指しているのは、誰からしても疑いようのない〈客観的実態〉の解明である。

ここでは、その一例として、お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」拠点形成事業の成果のなかでも、特に内田伸子（1946-）が中核となって推進した「幼児期における読み書き能力の獲得過程とその環境要因の影響に関する国際比較研究」に触れておこう²¹⁾。内田の研究方法は、しつけが人間形成にどのような影響を与えるかを見るという心理学研究の伝統にもとづきながら、さら

に階層性と学力という社会学的関心にもとづく因子も含めて調査を行っており、それゆえ、たいへん興味深い考察が示されている。ここでは、そのすべてに触れることはできないので、日本人のしつけスタイルを「共有型しつけ」「強制型しつけ」「自己犠牲型しつけ」²²⁾に分類したうえで内田がまとめたいくつかの論稿から興味深い点を3つ記しておきたい。①「幼児期に共有型しつけを受けた子どもは、強制型しつけを受けた子どもよりも、国語学力も語彙力も高いことが見いだされた²³⁾」、②「強制型しつけのもとでは、高所得層であってもリテラシー得点、語彙得点ともに低く、蔵書数も少ないという特徴がみられた」、③「低所得層で、なおかつ強制型しつけの傾向が高い場合に語彙得点有意に低下することが確認された²⁴⁾」。

こうした〈客観的実態〉の把握は、当然重要である。特に幼児教育への教育政策的重点化の是非が盛んに議論される今日にあつては²⁵⁾、どのような家庭的背景を抱える子どもが小学校への適応に苦慮するのかを調査から明らかにすることには意義も認められるだろう。しかし他方で、この研究からでは実際のしつけ手の「これから」にはほとんど寄与するところがない。「共有型しつけ」が良いのだとしても、では「強制型しつけ」を実施しているしつけ手はどうしたら良いのか、なぜ「強制型しつけ」を行うのか、彼女ら/彼らが「共有型しつけ」を目指すにはどうしたらよいか、といった問いは伏されたままである。実態把握の成果は、あくまでしつけ手へと還元する方途を伴ってこそ意義があるのであって、その点を見誤ってしまえば、こうした心理学、社会学研究の成果の意味は半減してしまうことだろう²⁶⁾。

しつけ研究の大半は実証的方法によって行われているといえるが、次のような視点はぜひとも忘れないようにしなくてはいけないだろう。

たとえば、父親の権威主義的な態度について、全人間的に理解して説明しようとするか、あるいは父親が子どもに対してとる禁止行為の頻度を統計表に描こうとするかでは、まさに根本的な違いがある。この簡単な

例にみられる違いは、方法の違いというよりはむしろ、科学者としてどうすれば有意義な言明に到達できると考えているのかの違いである。……もし父親の禁止行為の回数をただ数えるだけならば、権威主義的行為の頻度を知ることではできるが、そもそも「権威的である」とはいったい何であり、何を意味することなのかという問いについては、いっこうにわかってこない。教育上の禁止行為がどんな意味や正当性があるか、はたまた子ども自身や子どもと父親との関係にはいかなる影響を及ぼすのかについても、数量化は何も教えてくれない²⁷⁾。

3. しつけ研究はしつけの何をみてこなかったのか

方法を知り方法を反省することによって、方法の可能性と限界とを批判的に意識化することができる……。ひいては、ある方法を適用しないがために場合に応じて逸脱させてしまうものをも意識化するようになるだろう²⁸⁾。

①〈しつけ手の理解〉を理解するということ

そもそも、先行文献の多くは、しつけ場面におけるある一部分の研究対象を取り出し、観察や調査によるデータを収集、分析することで研究結果を導き出していた。しかし、しつけ場면을研究するといった場合、果たして、こうした研究方法しか存在しないのであろうか。

たとえば、次のような研究方法があっても良いはずである。すなわち、しつけ手の身における人間的なあらゆる現象をそのまま記述し、それを解釈していく、という方法である。それはつまり、しつけ手の生活世界そのものから、しつけ場면을解釈していくというアプローチである。たしかに多くの先行研究において、しつけ手が個人的に抱えているしつけ理解＝〈日常感覚としてのしつけ〉をありのままのかたちで描くことを目的としているものはほとんどない。もしも、こうした見方に立つのなら、次のような態度が要求される。「外にあらわれた行動は、内的意味をもつものとして問い返されねばならない。常識的理解は

破られて、さまざまな角度から反省され、全体の状況の中で理解は深められていく²⁹⁾」。このように、しつけ手がしつけ場面をどう捉えているかという理解の仕方を、研究者であるこちら側がさらに理解しようと努めるのである。ただし、実証的研究のように、ある一部分を取り出して研究対象とするのではなく、あくまでしつけ手が生きる世界の全体から、〈しつけ手の理解〉を理解しようとするのである——しつけ手以上にしつけ手のことを理解しようとするアプローチといっても問題ないだろう——。こうした手法は、ときに現象学的あるいは解釈学的アプローチと説明される³⁰⁾。こうした手法は、「教育実践においては、反復可能、検証可能という自然科学の規準は適用されない³¹⁾」という考えのもとに発展してきており、「理解ということを、どのように理解するかが、大きな課題³²⁾」と捉えるところに特徴がある。

実証的研究方法が選ばれやすいしつけ研究においては、これまで、しつけ手およびしつけ行為を全体性から理解しようとする傾向に乏しかった。しかし、現象学的あるいは解釈学的アプローチによる研究を重ねていくことで、不安や葛藤に悩まされるしつけ手の「これから」を、今まで以上に、共有したり、そこに意味を見出したりできるのではないだろうか。

②徐々に〈しつけ手になっていく〉という視点

倉橋惣三（1882-1955）は、『育ての心』のなかに「母の誕生・母の成長」³³⁾と題した短編論文を組み入れている。そのなかには次のようにある。一般的には「母が子を生む」というが、実際には「子が母を生む」のだということ、そして「母は子のお陰で成長する」のである、と。いわれてみれば当然のことなのであるが、誰しもが子どもを授かった当初からしつけに長けているわけではない。保育者や子育て支援に関わる関係者を除いて、大抵のしつけ手は、しつけに関してはまったくの素人という状態からスタートしていくのである。では、彼女ら/彼らはいつからしつけに長けていくのであろうか。また、そうしたプロセスにおいて、しつけ手は何を考え、何を学び取ろうとしているのであろうか。

要するに、こうした〈しつけ手になっていく〉過程というものが、しつけ手には必ず存在するはずなのである。しかし、従来のしつけ研究において、この点の解明を目的に掲げて取り組んでいるものはほとんどないように思われる。先行研究においては、すでに〈しつけ手になった〉者たちが主役であるし、もし実際には初心者が混じっていたとしても、彼女ら/彼らに寄り添うかたちの研究記述には減多に巡り合わない。

子どもが、しつけによって様々な文化様式を獲得していくのは当たり前であるが、実は、しつけ手の側も、しつけを繰り返すなかでしつけとは何か、効果的な方法は何か、などを獲得していくのである。さらには、どれだけしつけに慣れてきた者であっても、何かの拍子に、他人のしつけ場面に遭遇すれば、「自分ならもっとこうするのにな」といった比較を通じて自己理解が促されたり、「なるほど、ああいう風にいうと上手くいくのか」といった新たな方法の獲得が促進されるなど、何らかそこで学習が生じているはずである。私たちは、他人の親の振る舞いをみては、自分自身のなかに、しつけとは何であり何ではないかという境目を築き上げているのである。

こうした〈しつけ手になっていく〉という過程には、当然、自らの生い立ち——自分が小さいころにどのようなしつけを受けたか——や子どもの性格、そうしたものを含めた子どもとの相性、さらには家族一人ひとりが同様に抱えている歴史性との関係と現在の理解度、など様々な要素が含まれている。したがって、しつけを研究するということは、こうした〈しつけ手になっていく〉という過程全体との関係からしつけ手は何を学び続けてきたかという視点を欠いては、本来、成立しないものなのである。

ここまでの考察を以下のようにまとめておこう。しつけ場面というのは、しつけ手/子ども相互の歴史性が複雑に絡み合うことから生まれるその場限りの状況である。こうした状況に対して、ある一部分の〈客観的実態〉を取り出すという姿勢で研究を実施していく実証的方法もあるだろう。しかし、それ以外にも、こうした状況の只中にいるしつけ手/子どもが、その状況をどのよう

に理解しているのか、という理解の仕方を研究者であるこちら側がさらに理解しようと努めるといふ研究方法が実施されることで、しつけ場面の歴史性や関係する人々の相互構成的な関わりの様相を明らかにできるのである。

4. しつけ研究がしつけ手を置き去りにしないために必要なこと

一〈研究生活のための研究〉に陥らないために一

さて、ここに非常に興味深い資料がある。書かれた時期こそ1996年とすでに20年も前のものになってしまうが、米国小児科学会（American Academy of Pediatrics）が1996年2月9・10日、シカゴにほど近いイリノイ州エルクグロブで開催した「体罰の短期的・長期的結果」と題した学術大会の報告書である。その冒頭には次のようなことが書かれている。

子どもに対する効果的なしつけとは?という問いは、太古の昔から、親にとって最も複雑な問題の一つである。子どもからすれば、責任ある有能な大人へと成長するために、当面の長期にわたる生活環境を過ごすなかで、「人はどのように振る舞うものなのか」という点を学ばなければならない。それは、間違いから正しさを、悪から善を学習することを、さらには他者から慕われると同時に他者を敬うようになることを意味する。子どもたちは、親や他の権威者が設ける「例証」から、また基本的集団社会が子どもに課すテストから、あるいは単純な試行錯誤を経て学んでいく。子どもたちは、必然的に過ちを犯しながら、自分自身の一時の衝動を統制することを、また自分自身の無限のエネルギーをある活動の適切な方向へと向かわせていくことを学ぶことで、この長くて複雑な旅路をこなしていくのである。親からすれば、子どもに向き合う際に、そのしつけから学び取るであろうことを最大限に確実に保証したいものである。そのための最良の近道とは、思慮深い議論を子どもとすることなのであるのか、

それとも尻を叩く体罰なのであるのか³⁴⁾。

この報告書には、当日発表を行った発表者たちの発表論文とそれに対する応答論文なども掲載されているが、それらのタイトルをいくつか列挙すると以下ようになる。発表論文「しつけに関する親へのアドバイス：何ができるか」応答論文「臨床家たちはしつけについて親と話し合う際の何を知りたがっているのか」、発表論文「公共政策を変えるための研究利用：校内体罰撲滅にかけた20年を振り返って」応答論文「研究と公共政策」。こうした論文を読んでいると、大半が小児科医から成るこの学会において、いかにしつけ手たちに体罰以外の方法があることを示せば良いかと、研究者同士が知恵を出し合い奮起している様子が窺える。さらに、報告書の最後には参加者からの「Personal Statements」も掲載されているが、そこには〈養育態度〉研究で有名なDiana Baumrind (1927-) の寄稿なども存在しているのである³⁵⁾。

当然、日本においても、これと同様に複数の学問領域の研究者たちが集まったかたちで、しつけや虐待に関する会合は開かれているはずである。しつけ研究がしつけ手のための研究になるには、このような個々の研究を持ち寄りながら議論し合い、総合的なビジョンを見出していくような場がより多く必要なのである。そうした場において、互いの研究が互いを照らし合い、新たな意味の創出につながることで、しつけ手のためのしつけ研究に向かうこともできよう。

本来、「科学研究」は、「一群の共同作用する複数の方法をとおしてすすめられるもの³⁶⁾」であり、しつけを研究する際も、似通った同種の研究方法でのみ成果を蓄積していたのでは発展が見込めない。もちろん、「いろいろな方法も互いに衝突を引き起こす」ことにはなるが、「しかし科学的方法は、複数の方法が相互補完しながら共に作用しあうことによって意味をもってくる³⁷⁾」のであるから、我々研究者は、このことを肝に銘じなければならないだろう。

おわりに

かつて戸田雅美（1955-）は、「保育学とは、保育行為に関する判断の根拠を検討する学問である³⁸⁾」と語ったことがある。もちろんこの言葉は、保育学の学的性格について述べる文脈上のものではあるが、本稿の話にも通ずるところがあるように思われる。すなわち、しつけ手たちの日々の奮闘の一場面において、何をなすべきかと繰り返される「判断」の「根拠」づくりの一助として、しつけの研究が行われていく必要もあるのではないか、ということである。本稿でも見たように、「自信」をもって子どもと関わるのが現在のしつけ手にとって必須の条件になりつつあるのだとしたら、そのためにしつけ研究が貢献すべきことはまだまだあるはずである。

【註】

- 1) 拙著論文「しつけ研究の系譜と課題」『仁愛女子短期大学研究紀要』第46号、2014年、79頁。
- 2) スーザン・D・ハロウェイ「しつけ―子育ての秘訣」高橋登・清水民子・瓜生淑子訳『少子化時代の「良妻賢母」』新曜社、2014年、216頁。原著:Holloway, S. D. (2010). *Shitsuke: The Art of Child Rearing. In Women and Family in Contemporary Japan* (pp.119-142). New York, NY: Cambridge University Press.
- 3) 石川真由美「育児書・育児雑誌におけるしつけに関する考え方の分析―「叱る」「ほめる」に着目して―」『愛知教育大学幼児教育研究』17、2013年、29-37頁。
- 4) 「育児雑誌」や「育児言説」については、天童睦子編『育児戦略の社会学―育児雑誌の変容と再生産』（世界思想社、2004年）が参考になる。
- 5) 高橋均・天童睦子「資源としての育児雑誌」天童睦子編『育児戦略の社会学』前掲書、53-56頁。この著作が刊行されたのが2004年のため、この流れの延長にある2000年代、2010年代の育児雑誌記事の特徴については書かれていないが、この点の調査はぜひとも必要である。
- 6) スーザン・D・ハロウェイ『少子化時代の「良妻賢母」』前掲書、216頁。
- 7) たとえば、60年以上前にも、戸川行男「叱ることと褒めること」『児童心理』第9巻第11号、1955年）といった論文が出されている。
- 8) 太田肇『子どもが伸びるほめる子育て―データと実例が教えるツボ』ちくま新書、2013年。
- 9) 榎本博明『ほめると子どもはダメになる』新潮新書、2015年。
- 10) 社会統制の手法については、「同調を促進する正の制裁は事前的には奨励、事後的には表彰というかたちで報賞を与える。逸脱を阻止する負の制裁は事前的には禁止、事後的には懲罰というかたちで嘲笑・非難、暴力・法的処罰などを通して威嚇し剥奪する」（濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典 新版』有斐閣、1997年、269頁）などと説明される。あるいは、昨今の育児言説のなかには、「『叱る』と『ほめる』は常にセットに」という論調も散見される。発達心理学を専門とする岩立京子（1954-）は、「その行為をやめさせる、または減らすために必要なのが『叱る』『ほめる』には、その行為を増やしていく、身につけさせる効果があります」としたうえで、「しつけでは『ほめる7割、叱る3割』が基本です」と書いている（岩立京子『『叱る』ことで身につく6つのこと』『PHPのびのび子育て』2015年8月号、24頁）。
- 11) 拙著論文「なぜ『しつけ』に悩まされるのか」『仁愛女子短期大学研究紀要』第47号、2015年。
- 12) 「何のために『しつける』のか考えたことがありますか?」『AERA with Baby』vol.1、朝日新聞出版、2007年1月、28頁。
- 13) 同上、29頁。
- 14) 「理想的なしつけの基本 子どもはきちんと『納得』していますか?」『AERA with Baby』vol.1、前掲雑誌、31頁。
- 15) 「子どもを伸ばすvs.ダメにするしつけ」『育脳Baby-mo 0～3才の可能性を引き出す7つのこと』主婦の友社、2015年5月、87頁。
- 16) 柴野昌山「しつけの構図」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社、1989年、22頁。
- 17) ある特定の研究者集団にのみ共有されているパラダイムとその革新の構造に迫ったトーマス・クーン『科学革命の構造』（みすず書房、1971年）や、その優れた解説書である野家啓一『パラダイムとは何か』（講談社学術文庫、2008年）などを参照。また、上野千鶴子「〈わたし〉のメタ社会学」（『差異の政治学 新版』岩波現代文庫、2015年）なども参考になる。
- 18) 学問論や研究方法論を挙げれば枚挙に暇がないが、教育に関する学問論、研究方法論といえば、教育学の学的性格について数々の論争を繰り広げた精神科学的教育学に属する教育学者たちの論が興味深い。本稿ではヘルムート・ダンナー（Helmut Danner：1941-）の「方法を省察することの意味について」（浜口順子訳『教育学的解释学入門―精神科学的教育学の方法』玉川大学出版部、1988年）を参考にしていく。ダンナーはいう。「科学の名のもとに理解されるべきことも、研究活動も、もし異なった哲学的前提（世界像や人間像：筆者補足）から出発するならば違ったものになってくる」（18頁）と。
- 19) ヘルムート・ダンナー『教育学的解释学入門―精神科学的教育学の方法』前掲書、19-20頁。
- 20) 心理学と社会学の違いはといえば、しつけの実態や効

- 果的なしつけ方略の捉え方を、経験的事実としての意識現象（認知）あるいは行動を出発点に研究する（心理学）のか、それとも社会集団の構造あるいは機能を出発点に研究する（社会学）のかといったところにあるように思われるが、しつけの研究に限っていうと、実際の両者の研究方法は多くの点で重なり合っているという印象がある。ところで、一部の社会学研究者からは次のような提案もなされている。「これまで子どもを対象に研究してきたのはもっぱら心理学であった。幼児や児童独自の心理学的特性を解明しようとする児童心理学、あるいは生涯の発達過程の視点から児童期を解明しようとする発達心理学がそれである」。「伝統的な社会学も、また中心的な社会学者も子どもの問題を取り上げることがほとんどなかったのである。……だが、社会学が、個々人に自分の置かれている社会的現実の世界を理解できる能力を形成する学問であるとするならば、社会学のテキストから子どもが排除されていることは（女性が排除されていることも含めて）社会学的洞察の有効性を歪めることにもなりかねない」（住田正樹「子ども社会学の現状と課題」『子ども社会学の現在』九州大学出版会、2014年、243-253頁）。しつけ研究の系譜を辿った際に、社会学系の論文もいくつか挙げたが、たしかにそれらは「家族社会学」や「文化伝達」論という文脈に位置するものであった。そういう意味では、「子ども」の社会学研究は、しつけ研究の新たなパラダイムを切り拓くかもしれない。
- 21) 内田伸子・浜野隆編『世界の子育て格差（お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム 格差センシティブな人間発達科学の創成 2巻）』金子書房、2012年。
- 22) 「共有型しつけ」とは、「家族の団欒を大事にし、子どもと一緒に旅行するのが好き、いろいろなおしゃべりをするのが楽しいと思っているなど、親子のふれあいを大切に、子どもと楽しい経験を共有したい、というスタイル」のことで、「高い収入層に多く見られるしつけスタイル」だという（Benesseサイト）。他方、「強制型しつけ」は、「決まりをつくりやかましく言わなければ気がすまず、言いつけたとおりにするまで子どもを責め立てたり、行儀をよくするためには罰を与えたり、時には力のしつけもいとわれないようなスタイル」（内田伸子・浜野隆編『世界の子育て格差』前掲書、12-13頁）で、「経済層の低い方に多く見られた」スタイルだという（Benesseサイト）。Benesseサイト：http://berd.benesse.jp/berd/berd2010/video/uchida_2.html
- 23) 内田伸子・浜野隆編『世界の子育て格差』前掲書、142頁。
- 24) 同上、13頁。
- 25) たとえば、ジェームズ・J・ヘックマン著、古草秀子訳『幼児教育の経済学』東洋経済新報社、2015年。
- 26) 小川博久「現場研究への提言」（『日本保育学会会報』96号、1993年5月、2-3頁）は、保育学・教育学の学問論という文脈における発言ではあるが、本稿にとっても示唆的な内容である。「教育学で圧倒的に投稿数の多いものが歴史・思想研究である。文献実証的に完成度が高いと見做されやすいからであろう。一方、教育心理学のように、自然科学的研究方法への志向の強い分野では、実験と統計による実証の確かさが学問の証しとされる現実は今なお支配的である。……研究にとって教育現場のもつ複雑さは文献検証の対象にも、実験検証の場にもなりにくい。したがって学位論文を書くのであれば、現場研究はさけて通るべきだというのが大学院生の暗黙の了解となっている。……現場と学問研究とのこうした乖離は学問研究は現場の実態や課題を全体的状況としてとらえようとせず、自分の方法論に合った点だけを切り取るか、現場の実態に距離を置き、仲間内での対話ですませてきたことによる。……中村雄二郎の臨床論、霊長類学の研究法論、仙田満の遊び空間論、エスノメソドロジーの記録論、竹内敏晴の演出論等。いずれにせよ、文献検証的、思想紹介的研究、統計的精緻さだけを追求する心理実証研究の枠を超えて、現実をより総合的にとらえるための思考の武器を見つけることだ」。
- 27) ヘルムート・ダンナー『教育学的解釈学入門—精神科学的教育学の方法』前掲書、17-20頁。
- 28) 同上、21頁。
- 29) 津守眞「解説」ヘルムート・ダンナー『教育学的解釈学入門—精神科学的教育学の方法』前掲書、236頁。
- 30) 現象学的、解釈学的アプローチについては、先ほどから参照しているヘルムート・ダンナーのほかにも、ヴァン・マーネン（Max van Manen: 1942-）の研究が参考になる。ヴァン・マーネン著、岡崎美智子・大池美也子・中野和光訳『教育のトーン』ゆみる出版、2003年。Max van Manen. (1990). *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*. The Athlone Press.
- 31) 津守眞「解説」ヘルムート・ダンナー『教育学的解釈学入門—精神科学的教育学の方法』前掲書、236頁。
- 32) 同上、233頁。
- 33) 倉橋惣三『育ての心（上）』フレーベル館、1976年、70-74頁。
- 34) Foreword (1996). In *Pediatrics: the journal of the American Academy of Pediatrics*, 98 (4), p.801.
- 35) *Pediatrics: the journal of the American Academy of Pediatrics*, 98 (4), pp.803-860.
- 36) ヘルムート・ダンナー『教育学的解釈学入門—精神科学的教育学の方法』前掲書、21頁。
- 37) 同上、25-26頁。
- 38) 戸田雅美「保育研究の在り方—実践研究としての保育研究—」『保育研究』第15巻第1号、建帛社、1994年。